The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ゲーム読み物

ソニックの大冒険

ピンチはつづく どこまでも…！

ソニック・ザ・ヘッジホッグ

ゴッドマザー登場

「だ〜れだいッ？」

チャミーが思わず「ぎゃやや〜ッ！」っと悲鳴をあげた時、洞くつの奥のほうの巨大な生き物がこう叫びました。

「だ〜れだぁ、ばっかでかい声で叫びおってえ〜！」

それは、大きな岩がブルブルとふるえるくらいの、ブキミな声。

いえいえ、ふるえるのは、岩だけではありません。

その場にいたベルーカ・ブラザース、それにカレらの父親ホギ・ベルーカも、いっしゅん「ブルル……！」となりました。

「オ、オレたちじゃないぜ。カアーチャン。」

アントンが、あわてて言いました。

「マミーとお呼び！　マミーと！」

「ひぃぃぃぃ〜ッ！」

ベルーカ・ブラザースの一番上のお兄ちゃんが、その声に体を小さくします。

そうなのです。

「だ〜れだいッ？」と、地響きのような声をあげたのは、兄弟たちのカアちゃん、……いえマミーだったのです。

そのマミーの体の、大きいこと大きいこと！

アントン、マッド、ハッド、トッド、ミグ〜、そしてカレらの父親のホギの体重をぜ〜んぶ

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

これまでのストーリー

ニッキと妹のタニア、友人のリトル・ジョンは、モーターボートでホッグホッグ島に乗り上げてしまった。三人は島の洞くつで八チのチャーミーに出会い、宝物を見せられた。そこにベルーカ一味が現れて、三人はつかまってしまった。偵察に行ったチャミーは…。

足してもまだマケソ～、というほどでした。
マミーの名前は、ベラ・ベルーカ。
重い体に、さらにピンピカピンの指輪やネックレスを付けて、ドタ～っと岩のベッドに横たわっています。
その姿は、まるで何万年も前から生きてきた恐竜のようでした。
これでは、偵察に出たチャミーが、思わず「ぎゃゃゃ～ッ！」と声をあげてしまったのもムリありません。
ぴひゃ～、ヤバイヤバイ……！
チャミーは、あわてて自分の口を手でふさぐと、シュン！ 空中をす早く飛んで身をかくしました。
でも、
「マミー、あたいも今、ぎゃゃ～っていう悲鳴聞いたわ。」
と、ミグ～。続いて、
「おう、そうだそうだ。オレも聞いたぜ。」
「ダレだ？ かくれたって、ムダだぞ。」
などと口ぐちに言って、兄弟たちは、いっせいにあたりをさがしはじめたのでした。
ぶはぁ～、このチャーミー・ビー様としたことが！
さすがのチャミーも、冷や汗タラ～リ！
となりました。
しかも！
「わかった！ ニッキたちが逃げ出したんじゃないのが!?」
と、マッドが言いだしたのです。
「ニッキ？」
ちょっと気の弱そうな感じのホギ・ベルーカが言いました。
「ばっかだねえ、おまいさん。ほれ、お宝のところに忍び込んでいたガキンチョがいたって言ってただろう？ ちょっと、それよっか、このお紅茶なんだい！ すっかり冷えちゃってるじゃないか！」
ガッシャ～ン！
怒ったベラは、いきなりホギに向かって飲みかけの紅茶をお皿ごと投げつけました。
「おっと！」
ところがこのオトーサン、すこしもあわてず、
「あちょ！」
と、お皿とティーカップを指の先で弾くと、
「ホイホイ、こいつは、スマンスマンですっと！」
まるで、手品みたいに、お皿とカップを空中で回しだしたのでした。
「イエ～イ！ トーチャン、すっげえ～やぁ～！」
子どもたちが、どっと拍手します。
そ、それにしても、このアカルさはなんな

ベラ・ベルーカ（母）

ミグ～

ホギ・ベルーカ（父）

んだ！
　チャミーは、思わずどどっとコケそうになりながら、ポッカ～ンと口を開けてしまいました。
　だって、ブキミな洞くつに住む悪党たちにしては、意外なくらいに『明るい家族！』という感じだったからです。
　でも、そんなことに感心しているヒマはなさそうです。
　ゴッドマザーが、またまたドスをきかせて言いました。
「まぁ、とにかく。その捕りょどもを見てきな。逃げ出しようもんなら、ただじゃおかん。」
　ごくっ・・・。
　ゴッドマザーの迫力に思わずノドを鳴らしたのは、チャミーだけではありません。
　アントンをはじめとする子どもたち。それに、ちょっと前にあざやかなお皿とカップ回しを見せたホギも、すぐにキンチョーした顔で、紅茶を入れ直しています。
　そうなのです。このベルーカ一家にとって、母親のベラ・ベルーカの命令は絶対だったのです。
「マミー……？」
　四つ子の中で、一番おとなしいトッドが、すこしこわごわと質問しました。
「もし、ニッキたちが逃げてたらどうするの？」

アントン

トッド　マッド　ハッド

キャラメル・トイ王国…？

「どう～あっはははは～！」
　ベラは、いきなり残こくな笑い声をあげました。
「そりゃぁ～、もちろん……。」
　アントン、マッド、ハッド、トッド、ミグ～、そしてホギが、つつ～っと身を乗り出すようにして、ベラの次の言葉を待ちました。
　それは、チャミーも同じです。
　彼らに見つからないように、思いっきり耳をダンボにして息を飲みました。
「もちろん。火あぶり！」
「オオオ～！」ベラ以外のものたちが、いっせいに声をあげました。
　そして、パチパチパチ・・・、というたき火の上で丸焼きにされるニッキたちの姿を思い浮かべました。
「でなきゃ……。」
「でなきゃ？」
「こなごなにくだいて……。」
「こ、こなごなに……？」
「く、くだいて……？」
「そうさ。ほんでもって、……コロッケにしてやる！」
「ひぇ～！」今度は、「オオオ！」ではなく、「ひぇ～！」でした。
　声を上げたものの何人かは、
「ニッキたちのコロッケも、ちょっとおいしいかも知れな～い！」
と、いっしゅん思いましたが、すぐに「ブルブル！」と頭を振って身を引き締めました。
　その時です。

洞くつの外で、ボ～ッ／ という汽笛が鳴りました。

そして、その音を聞くと、ベラ・ベルーカの顔が、みるみるうちにニンマリとなっていくではありませんか。

「いらっしゃったわ。」

「ええ？ 誰がだい？」

ホギが、ベラの横たわるベッドのわきに、入れたての紅茶を置いて聞き返しました。

「キャラメル・トイ王国の王子と王女だよ。くっくっくっ・・・、オモチャとお菓子の引き換えに、たんまりとお金をもってお出ましだ～ね。」

なんだって／

チャミーは、思わず声を出しそうになりましたが、危ういところで口をふさぎました。

カレも、その王子と王女のウワサは聞いたことがあったのです。

なにしろ、キャラメル・トイ王国は、世界中の子どもたちからお菓子とオモチャを取り上げ、子どもたちから喜びをうばうことで世界征服を企んでいるといいます。

「アントン／」

ゴッドマザーが、司令官のようにアントンの名を呼びます。

「あいよ、カアーチャン／」

「マミーとお呼び、マミーと／」

「ひぃぃぃ／」

アントンは悲鳴をあげながらも、なれた手つきでカシンカシン／ と岩壁のスイッチを押していきます。

すると、洞くつの中だというのに、スルスルスル～っと潜水艦にある潜望鏡が下りて来ました。

アントンは、それをのぞき込むと叫びました。

「うっひょ～っ／ すっげえ～船だぁ／」

それからは、もう大変なさわぎです。

「ボクにも見せて／」、「あ～ん、次はあたいだよぉ／」などと、ハチの巣を突いたような大さわぎ。

これでは、それを見ていた本当のハチが見たくならないワケがありません。

「どれどれ、オレッチにも見せろ。」

とばかり、ブ～ンブ～ン／ チャミーもさわぎの輪に加わりました。ところが、

「ああ、うるっせぇ～、ハエだなぁ。」

と、アントンが言ったものですから、またまたタイヘン／

「よくも、このチャーミー・ビー様をハエと言いやがったな～／」

せっかくかくれていたっていうのに、怒ったチャミーは、ブスッ／ ハリでアントンのイボイボのシッポを突き刺しました。

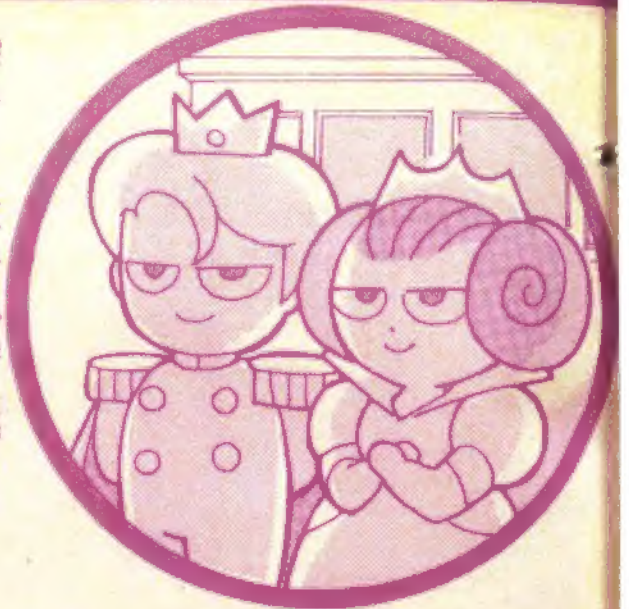
でも、

「ぎゃゃゃ～／」

次のしゅんかん、こう叫んでいたのはアントンではなく、チャミーのほうでした。

そうです。イボトカゲには、チャミーのハリは役立たず。

ヒサンなことに、チャミーの自慢のハリはグニャリと曲がってしまったのでした。

タニア

「ぴぇ〜！ そ、そりゃね〜よぉ〜！」
「こ、こら、待て！ こいつ、いつの間に！」
「さっき叫んでたのは、お前だな！」
四つ子たちは、どどっとチャミーを追いはじめました。
でもそこは、超スピードが売りモンのチャーミー・ビーことわれらがチャミー。
シュンシュン！ とカレらの追撃をかわしながら、ちらりと潜望鏡の中をのぞき込みました。
そして、見たのです。
オモチャとお菓子を満載にした、大きな大きな船が、このホッグホッグ島に向かってくるのを！
しかも、その船の甲板には、まるであの、〈キャンディ・プリンセス〉に描かれているような王女と、彼女と同様に、ニマ〜っと笑っている王子の姿が見えるではありませんか。
でも、そのニマ〜っというのは、あまりにブキミな感じでした。
だって、王子と王女は、まるで魔法使いにタマシイをうばわれてしまったもののように、生気を失っていたのでした。
「ズォオォ〜！」
さすがのチャミーも、幽霊を見た時のように、ゾ〜っとなりました。

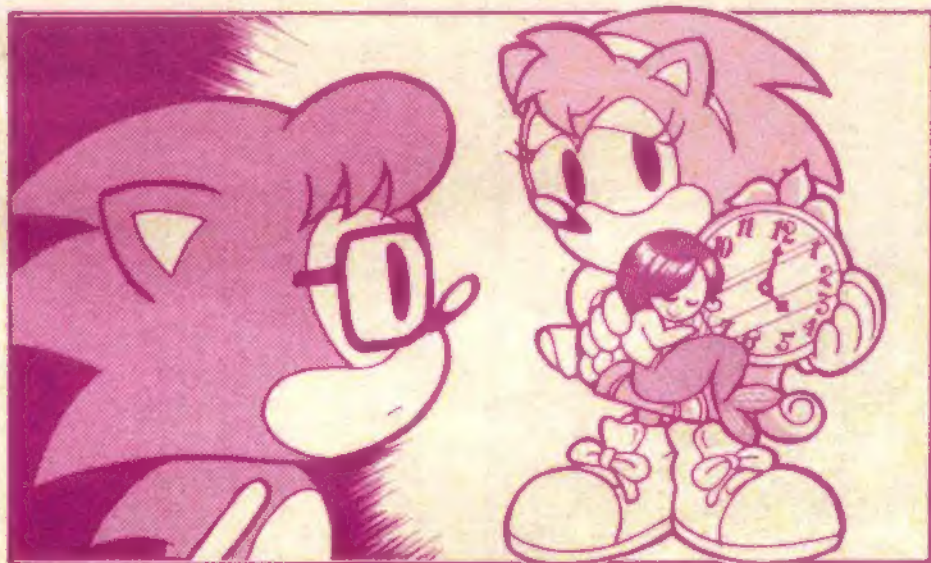
第3章 光速を超えて来た少年！

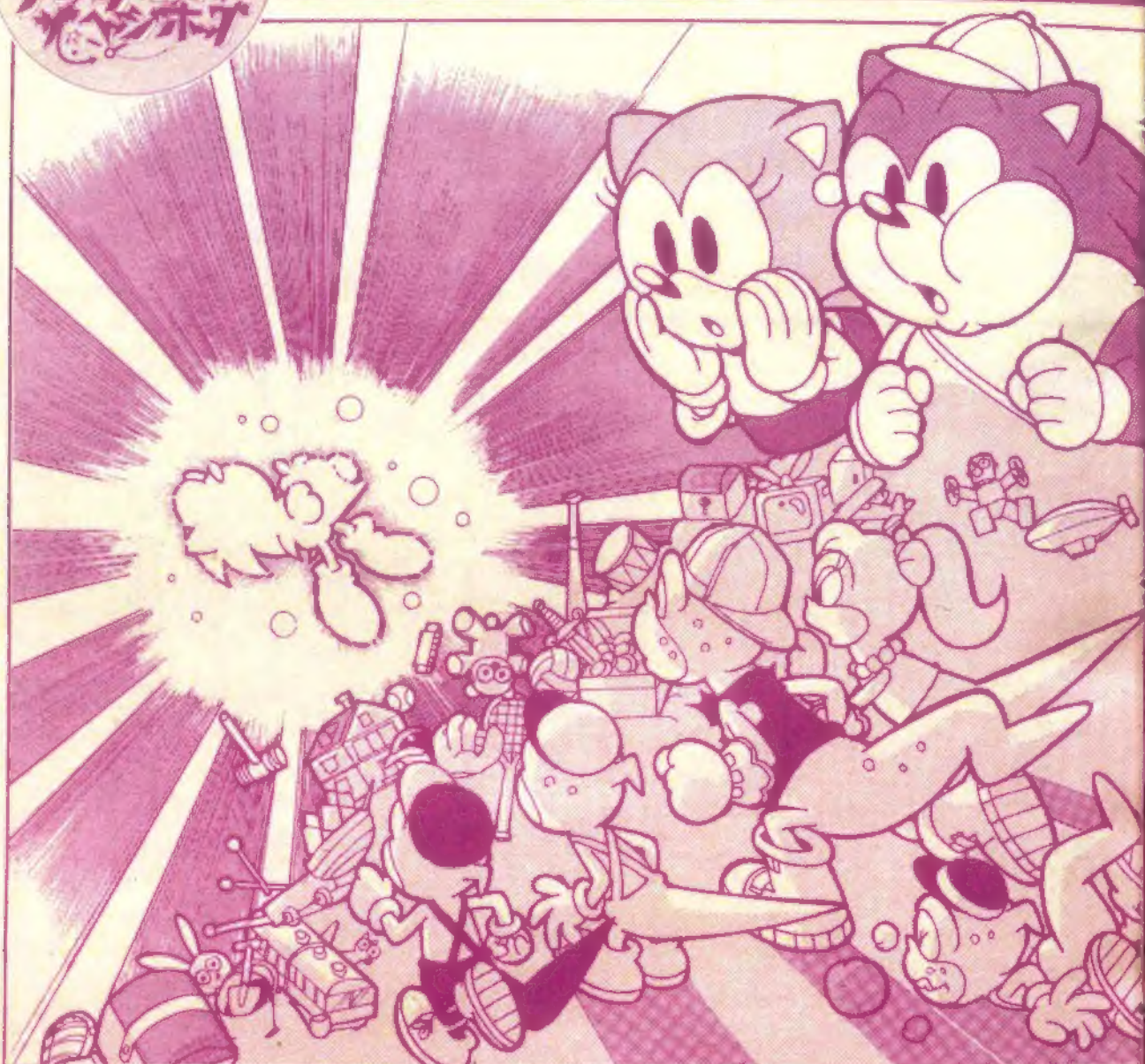
「お兄ちゃん、ナニやってんの！ 早く早く！」
さぁ、それからは、ハチの巣を突いたさわぎどころではありません。
まず、チャミーが、四つ子たちの追撃をかわしながら、ニッキたちのところにナイフをもってきました。
ナイフといっても、お肉を食べる時のナイフです。
ベルーカ一家の料理係は、ホギの仕事。逃げ回るチャミーの動きに目を回さんばかりのホギのスキをついて、チャミーはまんまとナイフをうばってきたのでした。
あとは、ニッキたちが、ナイフでロープを切るのと、アントンたちがやって来るのと、どっちが早いか競争です。
その間にも、チャミーは、大活躍。
「うわ〜ん、なかなかこのロープ切れないやあ。」
などと泣き言を言うリトル・ジョンを、「早くしろっての！」と急き立てながら、「くぉの〜！ オリ様のひん曲がっちまったハリ、ど〜してくりるんだよ〜！」
などとわめいて、大暴れ。
おかげで、ニッキたちはやっとのことで逃げ出すことができたのでした。
でも、逃げ出したのは洞くつの上のほう。ボートでたどり着いた入江では、ないのです。
そしてそこには、もうすでにキャラメル・

チャーミー・ビー（チャミー）
ニッキ
リトル・ジョン

トイ王国に渡すオモチャとお菓子が山のように積み上げられていました。
「お兄ちゃん、早く早く！」
タニアがさっきからこう叫んでいるのには、ちゃんとした理由があります。
アントンと四つ子が、チャミーにかき回されながらも、山を登って追って来ています。
ニッキたちは、さっさと下の入江のほうに下りて、お父さんのボートで逃げ出さなくちゃいけないのです
でも、なぜかニッキだけは、オモチャとお菓子の山のほうが気になってしかたありません。
「う、うん……。」
ニッキは、そう答えながら、それでもタニアとリトル・ジョンのほうに駆けていくことができないでいました。
実は、ニッキ、積まれたオモチャの山の上のほうに、あるとっても大切なものを見つけてしまっていたのです。
それは、ちょっと古ぼけた目覚し時計でした。
かわいらしい人魚のお人形のついた、時計です。
ニッキが、この時計を忘れるはずがありません。
それは、クラスメートの女の子、エミーがそれはそれは大切にしている時計だったのです。

時計をとり返せ

「この時計の音、おばあちゃんの声のように聞こえるの――。」
ニッキが、その時計をエミーの部屋で見つけた時、いつもは元気イッパイのエミーが、ちょっとかなしそうな感じに言いました。
「おばあちゃん？」
「おばあちゃんは、この時計をとっても大切にしていて、この時計が、ベッドの近くにないと安心して眠れないほどだったの。」
でも、やがて彼女のおばあちゃんは、重い病気にかかりました。
エミーたちは、大急ぎでおばあちゃんの家に駆け付けました。
しかし、遅かったのです。
エミーが、おばあちゃんのベッドに駆け付けた時、おばあちゃんは、この時計を抱くようにして死んでいたのでした。
おばあちゃんの最期を見取ったおじいちゃんが、エミーにやさしく言いました。
「残念なことをしたな。ばあちゃんは、このお気に入りの時計を、死ぬ前にエミーにあげたい、って言ってたんだが。」
ニッキは、その話をした時のエミーのキラキラと輝く瞳を、一生忘れないだろうと思ったのでした。

「父さん！ やっぱり、アレをここに置いていくワケにはいかないよね！」
ニッキは、いつだって困った時、こんなふうに大好きなお父さんに向かってしゃべります。
そして、父さんだったらこうする！
そう考えて、勇気をもとうとするのです。

エミー

「ようし！」
ニッキは、タニアたちが止めるのも聞かずにオモチャの山を登って、時計を取りに行きました。
「くぉの～！　そのお宝に手え～だすな～！」
アントンと四つ子も、ニッキの後を追って登りだします。
「あ～！　危ないお兄ちゃん！」
タニアが、叫びます。
それもそのはず、ニッキたちが山を登ったために、オモチャの山がいっせいに崩れはじめたのです。
しかも、山の向こうは、海面までは数十メートルもある絶壁！
「うわ～っ！」
ニッキは、崩れたオモチャとともに、海にまっさかさまに落ちていったのでした。
「ニッキ～！」
「お兄ちゃ～ん！」
ニッキの目に、ぐんぐん逆巻く波が迫っていきます。
そしてそれと同時に、頭の中が、パ～っと真っ白になっていきました。
ああ……、ぼくはもう死んじゃうんだ。さよなら、ママ。……パパ！
でも、その時です！
ニッキの体が、なぜかあざやかな青白い光に包まれていったのでした。

ニッキの運命は？　青白い光は…？　何が起きるのか？

つづく